

白藍塾オリジナル

2012入試小論文分析&解答のヒント

2012年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

●慶応・看護医療学部

今年も課題文に設問2つがついている例年通りの出題形式だ。今年の課題文は、日本人の精神構造を明らかにした古典的名著『「甘え」の構造』の著者、土居健郎の『「甘え」雑稿』からの抜粋だが、読み取りにはさほど苦労はしない。

課題文の主題は、頼むことと頼まれること、言い換えれば、助ける人と助けられる人の関係性だ。これは、人間関係のあり方、コミュニケーションのあり方という、医療系に頻出のテーマの一環でもある。

課題文は、前半で「お互いさま」という感覚の相互扶助、すなわちお互いに助け合う関係が、日本人の特長であり、それは、一方が上の立場で他方を助けるというのではなく、対等の関係だということを述べている。その上で、中盤から後半にかけて、実際にはいつも対等な立場ではなく、しばしば、助ける側が助けられる側の上に立ってしまう問題点が指摘されている。そして、頼む側もなかなか自分の求めていることや気持ちを表せないことが示されている。そして、課題文は、助ける側は決して優位に立つのではなく、助けられる側の気持ちをわからなくてはならないことを説いている。

問題1は、そうした課題文中の下線部「そうでないと本当の意味で助けることにならない」について、筆者の言おうとしていることをまとめる説明問題だ。これは、実質的には要約問題だと考えていい。書き方は基本型Aを使い、まず、下線部直前の「助けられる人の気持ちをわからなくてはならない」ということをズバリ示し、そのあと、「助ける側も助けられる側も本来は対等であるはずなのに、助ける側がしばしば優位に立ってしまい、助けられる側は自分の求めを言い出しにくいものなので、その気持ちを理解すべきだ」といった内容を手際よくまとめればよい。

問題2は、「頼むこと頼まれること」の経験から学んだことを書くように求められている。

筆者は、頼む側も頼まれる側も対等でなくてはならないという考えを示しているので、その考えに正面からノーとは言にくい。したがって、基本的に筆者にイエスの立場で書かざるをえないだろう。

では、どう書くか。

まず、筆者は、頼む側も頼まれる側も対等だと考えていることを手短かに示し、イエスカノーかの問いは省略するか、自分も同じ考えだと示して、「問題提起」とする。

「意見提示」では、「確かに」で、頼まれる側はどうしても、ある面で頼まれる側より優位に立ってしまうことを認める。たとえば、人より優れた専門的な知識や技術を持っている人が、それを活かさないと人を助けることができない場合などだ。その上で、「しかし」で切り返し、だからといって頼まれる側が優位に立つのではなく、頼む側の立場を考えるべきだとする。

そして「展開」では、頼む側の立場も考えながら、頼まれる側と対等であることが分かるような自分の体験を書き、分析を加えるとよい。具体的には、たとえばスポーツの経験があれば、チームメイトを助けて勝利の喜びを分かち合った経験、または怪我で出場できないチームメイトの気持ちを考えてプレーした経験があれば、それも書けるはずだ。友人同士の関係でもいい、ボランティアの体験があれば、それを書いてもいいだろう。

このとき注意したいのは、体験に感想を付け加える作文のパターンにしないことだ。いずれにしても、頼む側が何を望んでいるか、頼む側の言い出しにくい気持ちを考慮しないと、頼まれる側は適切な助力ができないことや、頼む側も頼まれる側も共通の目的を持っていること、場合によっては実は頼まれる側が頼む側から力づけられていたことを、論理的に説明したい。

なお、今年の課題文のテーマは、旧来の医療における医師と患者の関係、医師が優位に立ち、患者はそれに従うというパターンリズムの関係を批判したものとも受け取れる。だが、だからといって、無理に医療に結び付けて書くのは避けたい。こうした出題の場合、一般的なものの見方、考え方ができるかどうかを見ようとするのが、出題者側の意図だからだ。その点は注意したい

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)

<http://www.hakuranjuku.co.jp>